

天守閣の整備

1. 現天守閣の価値

(1) 市民の機運の高まりによる再建

昭和 20 年の戦災で焼失した名古屋城の再建は、戦後の住宅不足等の生活の根幹に関わる問題が山積している中、市民より自ずと声上がり始め、行政がその声に後押しされる形で推し進められた。募金活動は広く県下で行われ、愛知県をあげての一大事業であったと評価できる。名古屋城天守の再建は、市民の機運により再建が推し進められ、莫大な寄附と共に実現した、戦災復興の象徴であると考えられる。

(2) 昭和 30 年代の建築技術と再建天守閣の位置付け

名古屋城天守が整備された昭和 30 年代は、戦災復興の只中であり、耐震耐火構造、都市の不燃化が求められた時代であった。再建においては、そのような歴史的必然性の中、SRC 造が採用された。また、豊富な根拠資料に基づいて外観復元された大規模城郭建築において、ケーソン工法が初めて適用された事例であると考えられるが、一方で、ケーソン施工により石垣に悪影響を及ぼしたという側面もあった。

(3) 城郭における建築物整備の歴史の中での位置づけ

昭和 34 年に整備された名古屋城天守は、昭和 30 年代の城郭における建造物整備としては典型的な事例である一方で、同じように明治以降も天守が残りながら戦災で焼失し外観復元による整備がなされた他の 4 城と比べても、その根拠資料の豊富さとそれに基づく外観復元は、他の城郭には見られない特徴であると位置づけることができると考えられる。

(4) 博物館としての活用

昭和 37 年の博物館相当施設の指定後、大天守閣では、重要文化財等を含む各種展示が実施されてきており、博物館の目的の一つである一般公衆の教養に資することを達成してきた。

また、小天守閣においては、日本丸御殿障壁画や昭和実測図、その他史資料約 5 0 0 0 点や寄託品約 5 0 0 点を収蔵しており、名古屋城天守閣は、復興の象徴としての城郭の再建であると同時に、展示・収蔵機能を兼ね備えた博物館として市民生活に寄与してきたと言える。

2. 現天守閣の課題

(1) 建物

- ・現在の天守閣は、最上階階段の防火区画が形成されていない（建築基準法施行令第 112 条昭和 44 年 5 月 1 日）ことや、避難階段までの歩行距離が現行基準を超えている（建築基準法施行令第 121 条昭和 44 年 5 月 1 日施行）ことをはじめとして、建築基準法等、現行基準に対して既存不適格となっている。
- ・平成 22 年度（2010）に実施された「名古屋城天守閣耐震対策調査」によると、大天守閣の耐震性能を示す I_s 値は、各階とも基準値である 0.6 を下回っており、最も低い数値が見られたのは、7 階の X（南北）方向で 0.14 であった。これは、建築物の耐震改修の促進に関する法律で定める基準において、震度 6 強から 7 に達する程度の大規模の地震に対して「倒壊し又は崩壊する危険性が高い」と評価される結果である。
- ・コンクリートの中性化深さ試験の結果、大天守閣において重度の劣化が、小天守閣においては中度の劣化が発生している箇所が一部見受けられた。
- ・再建後半世紀が経過するため、経年によりエレベーター等の設備の老朽化や、外壁の剥離等が発生している。

(2) 石垣

- ・天守台の石垣については、平成 23 年度（2011）に「名古屋城天守台石垣健全性評価」が実施され、大天守北面と小天守西面の石垣が、安定上最も問題がある部分であるとの結果が出ている。
- ・天守台周辺の石垣には広く被熱した石が分布しており、石材の劣化が著しい部分が見られた。
- ・目視観察において、数か所の石垣で孕み出しが見られ、特に大天守北面及び小天守西面で顕著であった。
- ・孕み出し指数による評価においては、5ヶ所の石垣で「やや不安定」であるという結果となった。大天守北面の孕み出し指数が最も高く、4.1 であった。（孕み出し指数 0~2 が「健全」、2~6 が「やや不安定」、6 以上が「不安定」）
- ・既存ボーリングデータによると、石垣の基礎地盤としては大きな問題はないと考えられるが、大天守北面をはじめ、内堀に面した高石垣においては、石垣下部の背面にやや軟質なシルト層が出現することから、その部分が潜在的な弱点となる可能性が指摘された。
- ・間詰石等の抜け落ち、落下が見られ、来場者への影響が懸念される。

(3) 活用

- ・現天守閣は、日本丸御殿障壁画をはじめとする重要文化財や史資料等の展示及び収蔵を行っており、博物館としての機能を有している。しかし、収蔵庫の面積・高さが不足するなど収蔵面の課題や、展示作業にあたって屋根のない屋外通路（橋台）を通らなければならないなど搬出入時の課題がある。
- ・大天守閣内部に設置されているエレベーターは、地階から 5 階までの対応となっており、5 階から最上階までは階段を利用することとなるため、バリアフリーに対応していない。

3. 整備方針ごとの利点と課題

耐震改修	木造復元
<p>(1) 利点</p> <p>① 現天守閣の価値の保存と継承</p> <ul style="list-style-type: none"> 既存建物を活用すると共に、安全性を高めることができる。 戦災復興の中で市民の機運の高まりにより再建されたものであること、昭和 30 年代の歴史的必然性の上に選択された建築技術を現代に示していること、また、再建当時においても特徴的であった豊富な根拠資料により外観復元が成されたこと、といった現天守閣の持つ価値を保存し、後世に残すことができる。 また、現天守閣の価値の一つである、現状の博物館機能を維持し、継承することができる。 <p>② 観覧環境の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 往時の雰囲気を感じられるよう、内部空間をさらに木質化するなどの工夫を凝らした内装改修を行うことにより、観覧環境を向上することができる。 空調や照明など老朽化した設備を改修することにより、快適な展示空間を維持できる。 小天守閣のトイレを全面改修し、乾式化による衛生面の向上や、多機能トイレを設置するなど、便益施設における快適性を高めることができる。 <p>③ 文化的観光面における魅力の回復</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化的観光面の魅力を、内外装や展示の全面的なリニューアルによって向上させることができる。 	<p>(1) 利点</p> <p>① 特別史跡名古屋城跡の本質的価値の更なる理解促進</p> <p>復元に耐えうる根拠資料等に基づき、外観だけではなく内部空間を含めて、より真実性の高い復元整備を行うことにより、往時の名古屋城天守の姿が再現され、次の観点から特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解をさらに促進させることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 木造復元が進む本丸御殿と共に、名古屋城本丸において、近世城郭築城技術の完成期を実感できる歴史的、文化的空間を甦らせることができる。それにより、戦の場である天守と、生活、政治の場である本丸御殿の目的や役割、機能などの違いを実体験することができる貴重な学習の場となり、更なる理解促進につながる。 木造復元天守閣の建物自体が、築城当時の天守の防衛機能や藩主の物見、武器庫といった役割を学ぶことができる展示機能を新たに有することになり、往時の用途や機能の理解が促進される。 また、木造復元天守閣内において、現天守閣では観覧することのできない、狭間や石落としなど防御のための建築的特徴を鑑賞することで、築城当時の社会情勢や建築技術を学習する機会につながり、歴史的価値の理解を深めることができる。 <p>② 文化的観光面における魅力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 特別史跡名古屋城跡の本質的価値を構成する遺構と共に、往時の姿を正確に現在に伝える木造復元天守により、名古屋城の往時の姿と歴史的価値を分かりやすく伝えるとともに、名古屋城の魅力を向上させることができる。 内部空間を復元することにより、目で見て、手でさわって、鼻で匂いを感じ、足で登るなど、五感を使って天守閣の価値と魅力を楽しむことができる。 観光庁実施の「外国人旅行者のニーズ把握調査」において旅行出発前の段階で期待していたことの第 6 位に「伝統的な景観・旧跡」が挙げられていることから、木造復元天守閣は国内外において大きな観光資源となり、名古屋における文化的観光面の魅力向上につながると考えられる。 木造復元工事にあたって、素屋根内に見学通路を設けることにより、復元中であるからこそ可能な、復元過程や伝統工法の技術を間近で触れられる機会を提供できる。 <p>本丸御殿復元工事においても、工程に応じて約 140㎡～約 190㎡程度の素屋根内見学通路を設置し約 7 年間で約 114 万人の見学者を集めた実績がある。天守閣木造復元工事においては高層の素屋根を設置することになるため、約 1,500㎡にわたる見学通路を設置することが可能であり、更に幅広く伝統技術に触れる機会を提供することができると考えられる。</p> <p>③ 伝統工法による復元</p> <ul style="list-style-type: none"> 素屋根内見学通路だけでなく、復元過程を映像として記録することにより、ウェブサイトや講演会、また報道媒体による映像放送等を通じて、伝統工法による大規模木造建築の魅力幅広く発信することができる。また、それらの記録は、伝統工法を後世に伝える貴重な教材となり得る。 天守閣を木造復元することにより、伝統工法での復元における課題や検討手法、活用方法等の情報や経験を蓄積し、復元に至るまでの記録と共に広く情報発信することで、その成果を名古屋城だけに留めず、全国の他事例に寄与することができる。 <p>④ 新技術の導入と伝統技術の融合</p> <ul style="list-style-type: none"> 名古屋城天守閣の木造復元においては、大規模木造建築物及び伝統工法の構造的な解析及び評価をおこなう。現代の基準において、それらの構造性能を再評価することは、現存する他の伝統建築物の構造評価を行う上でも有益な情報になり得る。また、新たな伝統工法建築物を普及する材料となり得る。

耐震改修**(2) 課題**

① 特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進にかかる課題

- ・現天守閣は、外観はほぼ史実に忠実に復元されているが、鉄骨鉄筋コンクリート造での再建であり、真実性の高い内部空間の復元は行われていない。そのため、特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進につながりにくい。
- ・耐震改修では、壁や柱などの構造体を変更することはできないため、往時の間取りを復元することはできない。すなわち、築城当時の天守における、木造の柱や梁などの軸組や内装、鋳金具や格天井などの装飾、部屋や階段の配置、狭間や石落としなど防御のための建築的特徴などにみられる、往時の用途や機能、歴史的背景の実感が得難い。

② 耐震改修工事における課題

- ・現行基準に対し既存不適格となっている事項を更に精査すると共に、耐震改修工事やエレベーター改修工事により遡及適応の必要の有無を整理する必要がある。また、遡及適応が不要であったとしても、今後長期にわたって観光客を入場させるにあたり、管理者として、現行基準に適合させるかどうか検討が必要である。
- ・耐震壁等の設置により内部空間が制限されるため、展示収蔵機能について改修の検討や観覧動線の見直しが必要となる。
- ・現天守閣は、再建以来大規模な外部改修工事を行っておらず、外壁の浮きや剥離等劣化が進行しているため、耐震改修工事とは別途検討が必要である。
- ・コンクリートの中性化や鉄筋の腐食への対策を要する。
- ・現天守閣は5階までしかエレベーターが設置されていない。来場者が最上階である7階へと円滑に移動するためのバリアフリー対策が必要である。
- ・また、移動の円滑化という観点だけでなく、年齢や障害の有無、言語の違いに関わらず、誰もが楽しめるという観点における展示や対応方法の再検討も必要である。

③ 展示収蔵機能における課題

- ・現天守閣の展示収蔵機能は、収蔵面や搬出入面等の課題がある。

④ 現天守閣の閉鎖に伴う課題

- ・耐震改修期間約14か月の間、現天守閣を閉鎖することとなり、一時的な入場者数の減少や名古屋の観光面における魅力の低下が懸念される。

⑤ 天守台石垣にかかる課題

- ・耐震改修工事を行うにあたっては、特別史跡の本質的価値を構成する要素である石垣に悪影響を与えない工法、対策をとる必要がある。
- ・天守台石垣を適切に保全するため、十分な調査を行い、保全のための対策を実施する必要がある。また、穴蔵石垣など観覧動線に接する石垣に対する安全対策が必要である。

木造復元**(2) 課題**

① 現天守閣の価値の保存と継承にかかる課題

- ・現天守閣を解体することとなるため、市民の機運の高まりにより再建が成されたことなど、現天守閣が持つ価値の保存及び、可能な限りの継承に向けた対策を検討する必要がある。

② 木造復元工事にかかる課題

- ・外観のみならず、内部空間を含めた真実性の高い復元を行うため、バリアフリーへの対策をどのように行うか検討を要する。
- ・また、移動の円滑化という観点だけでなく、年齢や障害の有無、言語の違いに関わらず、誰もが楽しめるという観点における検討も必要である。

③ 展示収蔵機能における課題

- ・現天守閣を解体することとなるため、現天守閣が持つ展示収蔵機能を新たに担う代替施設の検討が必要である。

④ 現天守閣の閉鎖に伴う課題

- ・木造復元工事期間約46か月の間、天守閣を閉鎖しなければならず、一時的な入場者数の減少や、名古屋の観光面における魅力の低下が懸念される。

⑤ 天守台石垣にかかる課題

- ・現天守閣の解体工事及び木造復元にかかる工事を施工する際には、特別史跡の本質的価値を構成する要素である石垣に悪影響を与えない工法・対策をとる必要がある。
- ・天守台石垣を適切に保全するため、十分な調査を行い、保全のための対策が必要である。また、穴蔵石垣など観覧動線に接する石垣に対する安全対策が必要である。

4. 整備方針ごとの課題への対策

耐震改修	木造復元
<p>① 特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進にかかる課題への対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前述のとおり、現天守閣は、鉄骨鉄筋コンクリート造での再建であるため、真実性の高い内部空間の復元は行われていない。木造の柱や梁などの軸組や内装、銚金具や格天井などの装飾、部屋や階段の配置、狭間や石落としなど防御のための建築的特徴など、往時の用途や機能の理解を深めるような展示機能等の充実を図り、特別史跡の本質的価値の理解につながるよう検討する。 <p>② 耐震改修工事における課題への対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現行基準に対し既存不適格となっている事項を更に精査し、耐震改修工事やエレベーター改修工事による遡及適応の必要性を整理する。また、遡及適応が不要であったとしても、今後長期にわたって観光客を入場させるにあたり、管理者として、現行基準に適合させるかどうか検討を行う。既存不適格を解消し、現行基準を満たす場合は、耐震改修工事とは別途、防火設備の設置や、階段の増設などの大規模な改修工事を実施する。 ・耐震壁等の設置により内部空間が制限されるため、展示収蔵機能についての改修を検討し、全面リニューアルを実施する。また、それに伴い、観覧動線の見直しを行う。 ・再建以来大規模な外部改修工事を行っていないこともあり、外壁の浮きや剥離等劣化が進行しているため、耐震改修工事に合わせて大規模な屋根及び外壁改修工事を実施する。 ・コンクリートの中性化や鉄筋の腐食が既に確認されているため、コンクリートの中性化対策や外壁改修を実施し、鉄筋の腐食の進行を留める。すでに腐食している鉄筋についての対策は今後検討が必要である。 ・現在、階段でしか上がることのできない最上階までエレベーターを利用することが可能となるよう、エレベーターの改修を行うことにより、移動円滑化（バリアフリー）を促進する。 ・子供から高齢者に至るまで、また国外からの観光客まで誰もが楽しめるよう、それぞれに対応したパンフレットの作成や展示の実施、多言語対応の音声ガイド及び案内スタッフを配置するなどの対応を行うことにより、誰もが楽しめる観覧環境を整える。 	<p>① 現天守閣の価値の保存と継承にかかる課題への対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現天守閣が解体されることとなるため、現天守閣の再建された経緯や歴史的背景、採用されていた建築技術、活用されてきた実績を取りまとめると共に、現天守閣を静止画、映像などにより記録する。それらを、復元天守閣内等で展示を行うなど、現天守閣が持っていた価値を広く発信するとともに、後世に伝承する。また、解体に当たって、金鯪、瓦、破風等の一部の展示やモニュメントへの活用を検討し、現天守閣を偲ばせる部位の保存と伝承を検討する。 ・現天守閣の価値の一つでもある博物館機能が損なわれることとなるが、木造復元を行い、往時の名古屋城天守の姿を外観、内部空間ともに再現することで、天守閣自体が新たな展示機能を有することにつながり、展示・収蔵という博物館機能のうち展示機能については、形を変えて一部継承されることになる。また、収蔵機能については、後述のとおり対応し、重要文化財等の保管により適した環境を整える。 ・現天守閣の価値の一つに、市民の機運の高まりにより再建がなされたことがあげられる。それらの記憶を保存する必要がある一方で、本市実施の市民2万人アンケートにおいて、「2020年7月までに優秀提案による木造復元を行う」21.5%、「2020年7月にとらわれず木造復元を行う」40.6%、「現天守閣の耐震改修工事を行う」26.3%、「その他」6.2%、無回答5.4%というような、約6割が木造復元を求めているという結果も出ている。現天守閣の価値を記録することにも留意しつつ、市民と一体となり、寄附を募ることも含め機運を更に高めることで、新たな名古屋のシンボル化を図る。 <p>② 木造復元工事にかかる課題への対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外観のみならず、内部空間を含めた真実性の高い復元を行うため、バリアフリーへの対策が課題となる。天守閣内での移動の円滑化については、手摺やスロープなどの可逆的な付加機能の設置などの対応を行うと共に、設備だけでは対応が困難な来場者に対しては、介助スタッフを配置し、非設置型の階段昇降機のような最新技術を利用するなど、ハード面、ソフト面、両面での対応を行うことにより、課題を乗り越えることが可能である。 ・子供から高齢者に至るまで、また国外からの観光客まで誰もが楽しめるよう、それぞれに対応したパンフレットの作成や展示の実施、多言語対応の音声ガイド及び案内スタッフを配置するなどの対応を行うことにより、誰もが楽しめる観覧環境を整える。
<p>④ 展示収蔵機能における課題への対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両者ともに、現天守閣に収蔵されている重要文化財障壁画やガラス乾板などについては、西之丸に建設予定の重要文化財等展示収蔵施設に収蔵することにより、収蔵面や搬出入面等の課題を解決し、よりよい展示収蔵環境を整える。 ・その他の収蔵物については、耐震改修の場合、工事完了後、天守閣内の収蔵庫を再利用し、木造復元の場合は、近接地に新たに展示・収蔵を行う施設の建設等を検討し、対応する。 <p>⑤ 現天守閣の閉鎖に伴う課題への対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・耐震改修の場合、耐震改修期間約14か月の間、天守閣を閉鎖することとなり、一時的な入場者数の減少や名古屋の観光面における魅力の低下が懸念されるため、平成30年度に上洛殿等の完成公開を迎える本丸御殿を活用するなどの対策を検討する。 ・木造復元においても、木造復元工事期間約46か月の間、天守閣を閉鎖しなければならず、また、工事期間は耐震改修よりも長期にわたることから、入場者への影響や観光面における魅力の低下が懸念される。しかし、平成30年度に上洛殿等の完成公開を迎える本丸御殿の活用や、さらに、木造天守復元工事中でしか体験することのできない、復元過程見学のための素屋根内見学通路を設置するなど、「今しかできない」という付加価値を創出し、観光面においても新たな魅力を発信することにより克服できると考える。 <p>⑥ 天守台石垣にかかる課題への対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両者とも、天守台石垣の適切な保全のため、史実調査や立面図、縦横断面図、平面図、三次元点群データの作成などの測量調査、石垣カルテ作成、石材調査、劣化度調査、レーダー探査、段彩図作成などの現況調査、石垣裾部の発掘調査、石垣周辺の地盤調査など、石垣の現状を把握するための十分な調査を行い、その結果を基にFEM解析、DEM解析、実物大モデル振動実験、その他実験やシミュレーションなどにより検証、解析し、保全のための方針を策定した上で対策を実施する。また、石垣の保全対策だけでなく、穴蔵石垣など観覧動線に接する石垣に関して、人命を守るための対策を調査結果を基に十分検討した上で実施する。 ・耐震改修工事を行うにあたっては、特別史跡の本質的価値を構成する要素である石垣に影響を与えない工法・対策を検討し、実施する。 ・木造復元にあたっては、現天守閣の解体工事及び木造復元にかかる工事を施工する際、現在行っている調査成果をもとに、特別史跡である石垣に影響を与えない適切な工法・対策の検討を進め、実施に当たっては計測器等により変化の観測を行う。 	

5. 整備方針

- ・木造復元は、耐震改修と比較して、特別史跡内の建造物として、本質的価値の理解を促進するという点で優位性が認められる。
- ・名古屋城天守は、昭和 20 年（1945）、空襲により焼失し、昭和 34 年（1959）、鉄骨鉄筋コンクリート造で再建された。
- ・天守閣再建は、生活の根幹にかかわる問題がいまだ山積する中、経済的困難の中でも多額の寄附が集まり、市民の機運の高まりにより実現した。また、豊富な史資料を基に史実に忠実な外観復元がなされたものの、都市不燃化や当時の建築技術発展の流れを受け、耐震耐火構造である鉄骨鉄筋コンクリート造が採用され、内部はあくまでも近代的な博物館機能が備えられた。再建された天守閣は、いわば戦後復興の象徴であり、昭和 30 年代の記憶を現代に保存する貴重な建造物であるといえる。
- ・現天守閣は、上記のような確かな価値を有することは間違いない。しかし、一方で、「真実性の高い内部空間の復元が行われていない外観復元建造物」であるという側面も持ち合わせている。
- ・現天守閣は、先のとおり、外観はほぼ史実に忠実に復元されているが、内部は近代化された鉄骨鉄筋コンクリート造での再建であり、真実性の高い内部空間の復元は行われていない。すなわち、築城当時の天守における、木造の柱や梁などの軸組や内装、銚金具や格天井などの装飾、部屋や階段の配置、狭間や石落としなど防御のための建築的特徴などにみられる、往時の用途や機能、歴史的価値の「実感」が得難い状態であり、特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解が促進され難い状態であるとも言える。
- ・再建から半世紀以上が経過した現在、顕在化する諸課題への対応として耐震改修と木造復元の検討を行った。
- ・耐震改修を行った場合、現天守閣の価値を保存、継承できるという利点があるが、それは裏返せば、上述のような、特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解が促進され難い状況が継続されるということでもある。
- ・耐震改修を行い、安全性を確保したうえで、内部空間をさらに木質化するなどの内装改修や、往時の用途や機能等の学びを促す工夫を凝らした展示等を行うことで、一定の理解の促進は達成できると考えられる。だが、耐震改修では、壁や柱などの構造体を変更することは不可能なため、往時の間取りまでも再現し、歴史的空間の体感をするには困難であると言わざるをえない。
- ・一方で、復元に耐えうる根拠資料等に基づき、より真実性の高い木造復元を行い、外観だけではなく内部空間を含めて、往時の名古屋城天守の姿を再現することができれば、築城当時の天守における、木造の柱や梁などの軸組や装飾、木材のにおい、質感などを、時代を超え、五感を通じて実感することが可能となる。また、現天守閣では観覧することのできない狭間や石落としなど、城郭建築の特徴を鑑賞することにより、歴史的空間を体感し、天守が本来持つ用途や機能のさらなる理解へとつなげることができる。更に言えば、真実性の高い木造復元を行うことは、同じく木造による復元が進む本丸御殿と共に、名古屋城本丸において、近世城郭築城技術の完成期を実感できる歴史的、文化的空間の再生へとつながり、ひいては、特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解を更に促進させるものと考えられる。
- ・よって、木造復元は、耐震改修と比較して、特別史跡内の建造物として、本質的価値の理解を促進するという点で優位性が高いと考えられる。
- ・しかし同時に、木造復元を行う上での課題も決して軽視できるものではない。
- ・既に述べた通り、木造復元における課題のひとつに、現天守閣が解体されることに伴う、現天守閣の価値の保存と継承への対策があげられる。これに対しては、鯰、瓦、破風等、現天守閣を偲ばせる部位の保存と再活用を検討すると共に、現天守閣の再建された経緯や歴史的背景、採用されていた建築技術、活用されてきた実績を取りまとめ記録し、復元天守閣内等で展示を行うなど、現天守閣が持っていた価値を後世に伝承するため、広く発信し続けることによりその課題の克服を目指す。
- ・また、現天守閣の価値の一つでもある博物館機能が損なわれることとなるが、木造復元を行い、往時の名古屋城天守の姿を外観、内部空間ともに再現することは、天守閣自体が展示機能を新たに有することにつながり、展示、収蔵という博物館機能のうち展示機能については、形を変えて一部継承されることになると言える。
- ・市民の機運の高まりや寄附により再建がなされたことに対しては、それらの記憶を保存する必要がある一方で、名古屋市実施の市民 2 万人アンケートにおいて、「2020 年 7 月までに優秀提案による木造復元を行う」21.5%、「2020 年 7 月にとらわれず木造復元を行う」40.6%、「現天守閣の耐震改修工事を行う」26.3%、「その他」6.2%、無回答 5.4%といったような、約 6 割が木造復元を求めているという結果も出ている。現天守閣の価値を後世へ伝えつつも、市民と一体となり、寄附を募り機運を更に高め、木造復元により新たな名古屋のシンボル化を図ることもまた、課題を乗り越える方策の一つになり得る。
- ・また、バリアフリーに関する課題については、耐震改修より快適性の低下がみられる可能性があるが、手摺やスロープなどの可逆的な付加機能の設置などの対応を行うと共に、設備だけでは対応が困難な来場者に対しては、介助スタッフを配置し、非設置型の階段昇降機のような最新技術を利用するなど、ハード面、ソフト面、両面での対応を行うことにより、課題を乗り越えることが可能である。また、移動の円滑化といった観点からだけではなく、子供から高齢者に至るまで、また国外からの観光客まで誰もが楽しめるよう、それぞれに対応したパンフレットの作成や展示の実施、多言語対応の音声ガイド及び案内スタッフを配置するなど、広義の意味でのバリアフリーへの対応を行うことを検討する。その他前述の課題についても、堅実な検討を行うことで克服できるものと考えられる。
- ・加えて、木造復元においては、観光面における魅力の向上や、伝統工法による復元、新技術の導入と伝統技術の融合といった利点が見受けられる。
- ・観光面における魅力については、工事期間中という入場者数への影響や観光面における魅力の低下が懸念される状況下においても、復元過程見学のための素屋根内見学通路を設置するなど、「木造復元工事中の今しかできない」という付加価値を創出することで、観光面においても新たな魅力を発信し向上することができると考えられる。
- ・伝統工法による復元の利点としては、天守閣を木造復元することより、伝統工法での復元における課題や検討手法、活用方法等の情報や経験を蓄積し、復元に至るまでの記録と共に広く情報発信することで、その成果を名古屋城だけに留めず、全国の他事例に寄与することができる。
- ・最後に、新技術の導入と伝統技術の融合における利点としては、木造復元を進めるにおいて、大規模木造建築物及び伝統工法の構造的な解析及び評価を実施することで、現代の基準において、それらの構造性能を再評価することとなり、現存する他の伝統建築物の構造評価を行う上でも有益な情報になり得ることがあげられる。また、新たな伝統工法建築物を普及する材料となり得る。
- ・以上のように、特別史跡内の建造物として、本質的価値の理解を促進するという点において、木造の優位性が高く、また、木造復元における様々な課題や現天守閣が持つ価値に対する対策も可能であると考えられるため、整備方針は木造復元とし、検討を進める。